
ストーリーテリング

立木ノエミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリーテリング

【Nコード】

N5959D

【作者名】

立木ノエミ

【あらすじ】

「ねえ、皆、人には言えないような秘密の一つや二つ、抱え込んででしょ？」その一言が全ての始まりだった。台風の中、ホテルで足止めをくらった5人の年齢も職業も全く違う男女がそれぞれに秘められた秘密を語る……オムニバス形式です。

ブローグ

「ねえ、皆、人には言えないような秘密の一つや二つ、抱え込んでんでしょ？」

食い入るように写真を見入っていたそれぞれの顔に一瞬、戸惑うような表情が浮かんだ。女はその表情を見逃さなかった。

「いいじゃないの、どうせ日本に戻れば何の関わりもないんだから、私達」

それに……女は舌なめずりをするような視線を皆に投げかけた。

「秘密を持っているとすれば、きっと告白したい欲求に苛まれているハズよ。それが、本当に誰にも言えない秘密であればあるほど」
皆、妙にギラついた瞳でゴクリと唾を飲み込んだ。

「一体ナンなのよ、このホテル」

痩せぎすな女がローソクを片手に食堂に入ってきた。すでに食堂には日本人が数人、停電の心細さからか同じテーブルに座っている。

「普通、航空会社って五つ星ホテルを取るもんじゃないの」

「これでもこの島で一番いいホテルなんですよ」

そう女に声を掛けた男は南の島に似つかわしくない背広姿である。

「ふん、随分詳しいのね」

「この島に大きなリゾート施設を建設する案がありましてね、その視察で来たんですが……この調子じゃあ、企画倒れかな」

男はそう曖昧な笑みを浮かべた。銀の細いフレームの眼鏡が見る人に神経質そうな印象を与えている。

「ここはまだ風通しがいいぶん涼しいわね」

小太りな主婦と思しき中高年の女が呟いた。食堂には窓がなく南国らしく客席全体が風通しの良い造りになっている。雨が入り込む

のを防ぐために掛けられたビニールシートが時折風に煽られてバタバタと音を立てる。

主婦らしき女は不安げに眉を顰めた。鮮やかな南国の花がプリントされたワンピースが地味な容貌から浮いてしまっている。

「部屋の中は蒸し風呂ツスからね」

ジーンズにＴシャツ姿の若い男が主婦に相槌を打った。不安どころか、むしろこの状況を面白がっているようにも見える。ローソクの炎が日に焼けた肌を照らす。

そして一番奥の席には老人が一人、蒼白い顔をして座っていた。その佇まいは背広姿のサラリーマン以上にリゾートとは無縁に見える。年齢的にも戦没者の霊を弔いに来たと人は見るに違いない。

戦時中、この辺りの島一帯は日本の占領下にあった。実際この島にも日本軍が戦時中に建てた施設が廃墟となってそこかしこに残っているという。

ここ近年、手つかずの自然を売りにリゾート化が進められているが、観光客のほとんどが近隣の島から飛行機で日帰りで訪れるだけで滞在する人は少ない。彼らがこの島に滞在することになったのも天候不良で飛行機が欠航になったためだった。

またバタバタと風音がした。主婦らしき女がビクリツと身体を震わせる。シーズンオフのせいか食堂には他に客の姿はない。

「暗闇の薄気味悪さは南の島も日本も変わりありませんね」

背広姿の男は眼鏡を拭きながら淡々と言った。

「日本より薄気味悪いわよ」

痩せぎすな女が顎で指した先に残りの三人は目をやった。ホテルの周囲一面が闇に包まれているのは停電のせいだけではないような気がする。

食堂を照らすのも頼りないローソクの灯りだけである。浅黒い肌のボーイ達は油断すると闇の中へ溶け込んでしまう。

この世の中で自分達だけしか存在しないのではないか。そんな不

安と同時に不思議な連帯感が彼らのテーブルの上に漂っていた。

「お腹が空いたわ。何か食べるものない」

静謐を破ったのは痩せぎすな女だった。メニューを指差しながら何やらオーダーする。そして運ばれてきた大ぶりのクラブハウスサンドをよく手入れされた長い爪で挟み口へ運んだ。

「あなた、どこかで見たと思ったら、モデルさんよね。ほら、あの雑誌、何て言ったかしら」

痩せぎすな女は答えずに横柄に目だけで返事した。そうして瞬く間にクラブハウスサンドを平らげると同じものをもう一度注文した。「食べても太らない体質なのね。うらやましい」

主婦らしき女はうつとりと溜息をついた。

「あらあ、」

痩せぎすな女は声を上げた。

「私、元々痩せていたわけじゃないのよ」

そう言ってバッグの中から一枚の写真を取り出した。

そこに写る女の姿を、皆、食い入るように見つめた。

「まるで別人だな」

「一体どうやって痩せることが出来たの」

写真には百貫デブと言えるほどに太った女が写っていた。どこか南の島で撮影されたらしく、隣では浅黒い肌の男が女の肩に手を回している。二人は寄り添いあい、親密な仲であることが窺われる。

写真に写っているのが目の前と同じ女だとはとても信じられず、皆が驚愕と感嘆の声を上げるのを女はおかしそうに見つめていた。

「ねえ、教えてよ。一体どんなダイエットをしたの」

主婦らしき女はなおも食いついてくる。興味をそそられたのは何も彼女だけではない。背広姿のサラリーマンもジーンズ姿の若い男も女の口から語られるであろう話に期待に満ちた視線を送っている。「どうしてか教えてもいいけどお」

女はナプキンで口元についたケチャップを拭くと焦らすように呟いた。

「でも、私だけ秘密を教えるっていうのもねえ」

そう意味ありげな笑みを浮かべると、女はそれぞれの顔を見回した。

「ねえ、皆、人には言えないような秘密の一つや二つ、抱え込んでんでしょ？」

食い入るように写真に見入っていたそれぞれの顔に一瞬、戸惑うような表情が浮かんだ。ただ一人、老人だけは変わらず落ち着いた様子である。

「いいじゃないの、どうせ日本に戻れば何の関わりもないんだから、私達」

女は三人の顔に浮かんだ表情から何かを確信したのかも知れない。「それに」

女は舌なめずりをするような視線を皆に投げかけた。

「秘密を持っているとすれば、きつと告白したい欲求に苛まれているハズよ。それが、本当に誰にも言えない秘密であれば、あるほど」

三人は妙にギラついた瞳でゴクリと唾を飲み込んだ。およそ悪魔的で悪趣味な提案ではあったが、世俗から切り離されたような非日常的な状況がそんな酔狂に乗る気にさせたのかも知れない。

女は奥の席に身動きもせずに座ったままの老人に顔を向けた。老人は静かにしかし同意するかのようにゆっくりと頷いた。

「じゃあ、始めるわよ」

痩せぎすな女は写真を前に語り出した。

第一話 ブラックマジック

ちよつと待ってね。話す前にさっきのクラブハウスサンドをもう一つ追加するわ。あ、ボーイさん、コーラとポテトフライも。え、よく食うなつて。そうなのよ。食べても食べてもお腹が空くのよ……まさかつ、この写真の頃は食べたらず食べただけ太ったわよ。水を飲んでも空気を吸っても太るくらい……。それがどうしてつて？それを今から話すんじゃない。

さて、どこから話そうかしらね。まずこの写真なんだけど、バリ島で撮ったもののなの。

バリ島には今だにブラックマジックが存在することをご存知？憎い相手を病気にさせたり気を狂わせたり、あるいは好きな人を自分の虜にさせたり。日本人でも長い間バリに住んでいる人は掛かりやすくなるらしいわ。

え、呪いなんて単なる思い込みじゃないかつて。それが一概にそうも言えないのがこの話なのよ。

写真の隣に写っているのは私の恋人だったニョマン。ツアーのガイドだった。

ジゴロじゃないかつて？客観的に見ればそうなるわね。

デート代は全て私持ちだし、家族の病院代があるだの姪っ子の授業料を払わなければならんだの言つてはお金を無心してきたし……。

でも、その時は全くそんな風には思わなかったのよ。バリ島は物価が安くて、まがりなりにも日本でお給料を貰っている身の人間にとっては大した出費ではなかったし……。

それに、彼とても優しくったのよ……。

バカだと思つてんでしょ。お笑いよね。こんなに太つててこんなにブサイクで、優しくされたくらいでときめくなんて、何その氣に

なつてんだってね。自分でもそう思ったわよ。

でも……そんな私でも、一度くらい夢を見たかった。それまで男の人に恋愛対象と見られることはおろか、まともに話しかけられたことすらなかったのよ。

一度くらいときめいたって、一度くらい夢を見たって……。

ニヨマンはそんな私に夢を見せてくれるような事ばかり言ってくれた。君は可愛い。君は美しい。バリでは元々は太っているのが美人の条件なんだよ。何て白くてきれいな肌なんだろう。君は優しくしてやかだね。バリ人の女の子は気が強くてボクは苦手なんだ。それに君は汚れていない……要するに処女ってことね。

笑わせるわね。単に私を汚そうだななんて思う男がいなかったただけなのにな。

彼にお金を渡す瞬間、正直夢が覚めかける事もあったけれど、それでもニヨマンの言葉はどんどん、どんどん私の夢を強固なものにしていった。

そして遂に、彼が結婚しようって言うてくれた時、私はね愚かな錯覚に陥ってしまったの。

これは夢じゃない。現実なんだって。

ニヨマンはそれから自分の家族に紹介したいと言って私を家へ連れて行ってくれた。

彼の家はウブドから更に車で一時間ほど走ったところにある小さな村にあった。村の中でもあまり裕福ではないように見えたわ。

それでも貴重な鶏を一羽漬してくれて、家族全員で歓迎してくれた。ニヨマンのお母さんも「粗末なところだけど好きなだけ居て頂だい」って言うてくれた。

まあ、考えてもみれば私がいる間は私が生活費を払ってくれるんだもの。大した金額ではないけどね。一〇日いて色々払ったって日本円にしてせいぜい一万円掛かるか掛からないくらい。バリの中でもとりわけ田舎の貧しい村だったからね。

日本に戻ってから二ヨマンは私にしょっちゅう手紙を書いてくれた。

君がいないと寂しいよ。今度はいつ来るの。家族も皆、君がいなくて寂しがってる……。

そんな言葉の合間にお金を無心する言葉が書かれていた。でもその時にはもう何の疑問も抵抗もなくお金を送ってやる私がいた。もちろん、大した金額じゃなかった。一万円とか、せいぜい二万円。それに更に二ヨマンへのお小遣いとして一万円くらい多めに送ってやった。

そうして次の休みには私は彼の実家に泊まりこんだ。家族は私と二ヨマンのために一部屋空けてくれていた。そこで私は二ヨマンと二人で眠った。

でも、私と二ヨマンの間に肉体関係はなかった。彼は結婚するまで我慢すると言って私には指一本触れようとはしなかった。君の事を大切にしたいんだって……。

正直、物足りなさを感じたけれど、自分から求めるようなはしたない女だと思われなくなかったし、大事にされているんだって自分に言い聞かせたの。

二ヨマンのお父さんはすでに他界していて、家にはお母さんとお祖母ちゃん、お姉さん夫婦とその子供が二人、もう一人お姉さんと妹の九人家族だった。

私が使っていた部屋は元々二ヨマンとお姉さん、妹と三人で使っていたらしく、私がいる間お姉さんはお母さんとお祖母さんの部屋へ、妹の方は子供部屋で寝起きしていた。

この妹はなぜだかワヤンって呼ばれていた。

なぜって言うのもバリ人は生まれた順番で呼び名が決まっていて、一番上はワヤン、二番目がマデ、三番目が二ヨマン。だから二ヨマンの妹だと四番目だからクトゥと呼ばれるはずなの。

不思議に思っている日聞いてみたら、四番目は弟だったけど生ま

れて間もなく死んでしまったんだってニヨマンは私に説明した。だから彼の妹は一周回ってきてワヤンになるんだって……。

ワヤンは二人の姉と比べても一番きれいな娘だった。ニヨマンはたった一人の妹だからって可愛がっていたんだけど、私はちょっとね。

お姉さん達と比べて何だかつつき難いし、彼女も私の事をあまり気に入っていないように見えた。そのくせ私とニヨマンが出掛けようとするすぐに自分もついて来たがるし……。

それでも我慢したわよ。だって好きな人が可愛がっている妹ですもの。

知らないところで勝手に私の化粧水やらクリームを使ってるのも気づいていたけど大目に見ていたわよ。たくさん姉妹がいれば反りが合わない小姑だっているだろうし、何よりも私はお金を家に入れているから何も遠慮なんてする必要なかったしね。

彼女がどんなに私を煙たく思おうと、私を追い出すことなんて出来なかったのよ。

そんなある日、軒先で一人涼んでいると、彼の家で飼っている犬が庭の土を掘り起こしていたの。何を見つけたんだろうと思って近づいてみると、土の中からは私の下着が……。

驚いて更に掘り起こして見ると、他にも紙に包まれた髪の毛やら爪の切り滓やらが出てきたの。

ピンと来たわ。

ブラックマジックよ。

ブラックマジックでは呪いたい相手が身につけていたものや髪の毛が使われるの。

そして私にブラックマジックを掛ける人間の心辺りは、一人しかなかった。

そう、ニヨマンの妹のワヤンよ。

嫌な予感が胸をよぎった。

それから二、三日、私はブラックマジックに掛かった振りをして

様子を伺ったの。気分が悪いと言ってみたり、突然奇声を発してみたり、庭中を転がってみたり……。

「何だか具合が悪いの。今日は別の部屋で眠って頂だい」

そんな私の言葉にニョマンは何の疑いも持たずに部屋を出て行つたわ。彼もまた、私がブラックマジックに掛かったものと思い込んでいた。

やがて夜も更けて、家中、いえ、村中が眠りに包まれた。

私は俄かに起き出して暗闇の中、部屋を抜け出し、子供部屋をそつと覗いてみた。

そこに眠っているはずのワヤンの姿はない。

外で何やら人の気配がする。

雲ひとつない、月明かりの夜だった。

そして目の前に現れた光景に私は目を見開いたつ。

重なりあう二人の影がまるで影絵人形のように庭一面に照らし出されていた。
ワヤンクリット

影の中の女は背中をしなやかに反らし、男はその細くくびれた腰をしっかりとその腕に掻き抱いている。長い女の髪の毛が柳のようにユラユラと揺れる。

ワヤンは妹なんかではない……ワヤンは、ニョマンの妻だったのだつ。

一番見たくない光景のはずなのに、私の目は釘付けになった。

壊れた人形のように何度も何度も腰を振り続けるニョマンとワヤンの影を私はじつと、息を潜めて凝視し続けながら思った。

夢が覚めた……。

いや、覚めるには遅すぎた。

私の心はすでに自分の錯覚や勘違いを笑えないところにまで来てしまっていた。

バカにして……二人でああやって影でイチヤつきながら、ブタで醜い私をずつとずつと……バカにし続けてきたのかつ。

私は二人に気づかれぬよう寝室へ戻ると布団に入った。もちろん寝つけやしなかった。そうして天井を這うトツケイを見つめながら、私は思った。

私も二人にブラックマジックを掛けてやろう。

見つかった時には呪いが倍になって返ってくるのは日本もバリも同じ……。

トツケイが天井でゲツコ、ゲツコと鳴いていた。

翌日、私はニヨマンにロスメンの建設の話を持ちかけた。

ロスメンというのはいわゆるミニホテルのことで、ニヨマンは前から私に共同経営しようと熱っぽく語っていたのだ。しかし日本人はバリで土地や不動産を買うことは出来ないから結局はニヨマンの名義で建てるしかない。万が一騙されるようなことになったら……例えニヨマンの頼みとはいえさすがの私もその誘いに関しては躊躇していたのだ。

そんな経緯があつたのでニヨマンは大喜びだった。

私は不動産屋へ一〇万円ほどの手付け金を支払い、日本に戻り次第、頭金として五百万を振り込む旨を伝えた。そうして何年かは日本でも仕事を続けるつもりだからローンが焦げ付くことはないと言われた人間にも熱っぽく語った。更に目の前で通帳の残高が記入されたページがファックスで送られてくると、その場で銀行からの融資が下りることになった。

私の変わりように、ニヨマンもワヤンも何の疑問も感じてはいなかった。彼らは単純にブラックマジックが効果を表したのだと信じて疑っていないようだった。

ロスメン建設が着手されたのを見届けてから、私は日本へと帰っていった。

帰国する日、私はワヤンへの置き土産がわりに鏡の前に半分残った化粧水の瓶とコトンを何枚か置いておいた。

その後、私はバリへは戻らなかった。もちろん頭金なんて振り込

むわけもない。

一年ほど経って、私は再びバリへと向った。

ニヨマンとワヤンの落ちぶれようをこの目で見てやろうという悪意の下に。

もはや何の郷愁も抱かせはしない鄙びた村に私は再び足を踏み入れた。そしてニヨマンの家の前に立った時、私は驚きで声が出なかった。

家はすでに廃墟と化していた。

近所の人に話を聞くと宛てにしていた銀行からの融資が白紙になってしまったニヨマンは何とか建設業者に金を払うために方々で借金を重ねた挙句、首を括って自殺した。

村社会のバリでは村八分にされた家族はその村では生きていけない。残された家族は村を出て行方知れずだと教えられた。

私はすぐさまワヤンは一緒に村を出たのか尋ねた。

ワヤンは実家に戻って年老いた祖母と二人で暮らしていた。私は村はずれにあるというワヤンの実家へと向った。

ワヤンの実家もニヨマンの家と変わらないくらい寂れていた。唯一の違いは人が暮らしている匂いがあるくらいか。

私はそつと庭を覗いた。

軒下に若い女が腰掛けている。

それがワヤンだと気づいて、私は思わずアツと声を上げてしまった。

ワヤンの顔は無残にも焼け爛れた跡が残っていた。

私が残していった化粧水だ。

ただし中味は、酸の強い漂白剤を詰め込んでおいた……。

人の気配に気づいたワヤンは立ち上がると門の前にフラフラと近づいてきた。

まさか、ここまで酷いことになるとは……やった本人ですら目を背けたくなる有様だった。

ワヤンは私を見るとヘラヘラと意味不明な笑いを浮かべた。
いや、ワヤンはすでに私を見てさえいなかった。

ワヤンは気がふれていた。

髪の毛はバサバサで服は汚れ、鼻をつく悪臭が漂っていた。糞尿の後始末も自分では出来ないようだった。

衝撃のあまり私は金縛りにでも掛かったかのように動けなくなっていた。そうしていると奥から上半身裸のサロンだけ巻いた老婆がわめきながら近づいてきた。

そうしてワヤンを脇へ追いやると老婆は枯れ枝のような細い指で私の腕を掴み、私の耳元で何やら呟くと息をフウツと吹きかけた。

私はヨロヨロと二、三步後ずさると慌てて車に乗り込み、そのまま逃げるようにしてその場を離れた。

そして二度とその村へ足を踏み入れることはなかった……。

「それからしばらくの間、不安だったわよ。あの老婆、一体どんなブラックマジックを掛けたんだろうつて、気が気じゃなかった」

痩せぎすな女はコーラの瓶に突き刺さったストローを口に咥えた。
「もしかして、老婆が掛けたブラックマジックっていうのは……」

「そんなっ。なぜ彼女を痩せさせるようなマジックを」

女はコーラの瓶をコトリとテーブルに置くと顔を上げて言った。

「昔の人だからね。痩せぎすな女っていうのは貧しさの象徴だし、子宝にも恵まれないってんで嫌がられたそうなのよ。老婆の世代では肉付きよく太っているのが美美女の条件だったのね。それと飢えに対する恐怖かしら……でもこの飽食の時代、飢えることなんてないのよね」

女は皿に残ったクラブハウスサンドの最後の一切れを頬張った。
「皮肉ね。痩せたおかげで私はモデルとして高給を得て、食うには

困らない」

そう呟いて女は目の前のローソクの炎をフツと吹き消した。

「さて、お次は誰の番かしら」

皆、それぞれに自分以外の相手の顔を見回した。不気味な好奇心に瞳が爛々と光っている。やがて四人の視線は奥の席に座った老人に向けられた。注目の的となっても老人は落ち着きを失わない。俯きかげんに座っているのですその表情は見えないが他の人間と違って顔色一つ変わらない。

「爺さんは後にしよう」

若い男がそう言った。

「長生きしてる分、そこのおばさんとか比べものにならないくらい凄い経験とかしてきてるよ。先に聞くのは勿体ないよ」

主婦と思われる女がピクリと眉を動かした。おばさんと言われたのが気に障ったらしい。

「じゃあ、あなたがお話になれば。さぞかし凄い秘密を持ってらっしゃるんでしょうから」

主婦のトゲのある言葉を茶化すように若い男はワザとらしい仕草で肩をすくめた。

「まあね、学校ってところは色々あるんですよね」

「学校？ あなた教師なの」

一斉に若い男に注目が集まった。若い男は「まあね」と頭を掻きながら言った。

「桐生西中学校って知らないかな。今年の二月、生徒の中で自殺者が出た」

「桐生西中って、男子生徒が学校から飛び降り自殺した、確か受験ノイローゼかなにかで。君はそのの、」

「あ、あなた、テレビに出てたわよね。生徒がそこまで追い詰められていたことに気づいてやれなかったって、涙ながらに訴えてた。まさかあの時の……」

まあまあと宥めるように若い男は両腕を伸ばして矢継ぎ早な質問

を制した。

「あん時は自分もヒヤヒヤもんでしたよ。何とか周りがノイローゼ
つてことで納得してくれたからよかったものの」

「え、じゃあノイローゼじゃなかったの」

若い男は好奇心を剥き出しに自分を見つめる周りの人間を愉快げ
な瞳で見つめ返した。

「いじめですよ。確かにノイローゼ気味だったかも知れないけれど、
それもいじめが原因」

「いじめが原因って、あなた知ってて……」

男は茶化すようにゆつくりと言葉を区切りながら言った。

「だ・つ・て・え、俺なんだもん。自殺に追い込んだの」

他の三人は驚き呆れて目を見開いた。そんな周囲の反応を若い男
は愉快げにクスクス、クスクスと笑った。

奥の席の老人だけが身動き一つしなかった。

第二話 ロダン

さっき言ったように俺は桐生西中学校で社会を教える。社会って教科は英語や数学と比べて受験ではあまり重要視されていない科目だけど、まあ俺はさ、こうやって休み毎に海外へ出て見聞を広げて、それを子供達に教えてやってるワケ。

旅から戻ったら毎回、学校通信にその年の旅行記を載せて……まあ、そんな訳で教師のヒエラルキーの中でも一番低いとされてる社会科教師だけど結構一目を置かれてるんだ。

生徒の親なんかもさ積極的にコミュニケーション取ってて、っていうかほとんど飲みニケーションなんだけど。PTAの信頼もかなり厚いしね。サラリーマン化された教師が多いなかで先生みたいな方は珍しいっ、なんて言われちゃって。

まあ大変だけどね、実際。教職ってやっぱりプライベートも犠牲にせざるをえない職業じゃん。

え、結婚。いやあ、まだまだ。いや、彼女はいますよ。まあ、一応。でも、結婚はどうかなあ。俺、忙しいッスからね。

いや、旅には連れてこないッスよ。だって、めんどくさいじゃないッスか。

話が逸れちゃったな。とにかく、俺は桐生西中学校の教師で事件があった年、つまり昨年度、初めて三年の担任を受け持つことになった。

え、三年はほかの学年と何か違うのかって？

ぜんっぜん、違いますよ。高校受験を控えてるから生徒はもちろん、親とも接する機会が断然多いし、もう責任感が全然違うってカンジ。それもこれも、その前の年受け持った二年の生徒の親達が是非引き続きって学校に掛け合ってくれたお陰なんスけどね。

でまあ、そのクラスに問題の自殺した生徒がいて、あだ名はロダ

ンって呼ばれてただけ……まあそのあだ名の由来はまた後で
てことで……コイツがまた見るからにいじめられっ子な顔してるワ
ケ。

齧歯目みたいにやたら前歯二本が大きく前に突き出でて、眼鏡を
かけた典型的なモヤシっ子。いつもオドオドして人が話しかけると
俯き加減に目を泳がせて……。

こりやどうにかしなきゃなあって思ったワケよ。不良といじめら
れっ子は初めが肝心だからね。で早速二年の時の担任に話を聞いて
みたワケなんだけど……。

「そうですねえ、いじめられてたつていえば、そうなのかも知れな
いけれど……」

どうも歯切れが悪い。まあ、女子大出のお嬢様教師じゃあ仕方が
ないか。そう思った俺はとりあえず二年の時のクラス日誌だけ借り
ることにした。

「あの」

クラス日誌を持ってその場を離れた俺にその教師は言った。

「あの子にあんまり関わらない方がいいと思いますよ。ヘタに首突
つ込むと、うるさいですから」

俺は開いた口が塞がらなかったね。こういうヤル気のない教師が
生徒のいじめを増長させてんじゃないかってね。

俺はさ、皆がクラスの一員になって欲しいワケ。一致団結ってい
うの。バラバラなクラスってのは体育祭なり文化祭なり、そういつ
た行事の節々で見えちゃうのよ。それってさ結局担任の統率力がな
ってないってことじゃん。

俺は絶対自分の色のクラスを作ってみせる。

そうして俺は初めてのホームルームを向えた。

「誰か学級委員に立候補する奴はいないかあ」。じゃあ、俺が決め
るぞ。田村浩三。はいっ、おまえやれ」

名前を呼ばれた生徒は「えーっ」と派手に声を上げた。

三年にもなるとクラス委員に立候補する奴どころか、委員は押し

付け合いになる。だから俺はあらかじめ委員に任命する生徒を三期先まで決めていた。それもただ適当に決めたというわけじゃない。成績が芳しくない生徒を委員に割り振って、何とか内申書の点数を上げてやろうというワケ。

田村は俺が顧問をしている野球部員で気心もしているし、何よりもコイツが行きたがっている野球の名門校は今まだと難しいところだ。だから内申書でバックアップしてやる必要がある。

更に副委員長にはちよつと派手なギャル系の水野を指名した。こいつも勉強は出来ないがギャル系グループの中では中心的な存在だし、地味で真面目な副委員よりは女子がついてくるだろう。

こんな風に十分ほどでさっさとクラス委員を決めてしまふと俺は生徒達をグラウンドに連れ出してドッチボールを始めた。どうせ聞いでもないような自己紹介なんかよりも、一緒に身体を動かして汗をかいた方がいいに決まっている。

ドッチボールを始めるとついつい生徒以上に熱くなってしまうのが俺の悪い癖だ。皆でドッチボールを始めて二十分くらい経った頃か、ふとロダンの事を思い出した俺は持っていたボールを別の生徒にパスして目でロダンを探した。

案の定ロダンはボールを当てられて陣地の外にいた。いや、陣地の外というよりもすっかり蚊帳の外といったカンジ。

俺はロダンに近づいた。

「何やってんだ、お前も参加しなきゃあ」

ロダンは曖昧な笑みを浮かべた。俺は転がってきたボールを拾ってロダンに渡した。

「ほら、投げんだよ。ほらこうやって」

俺はロダンの手に自分の手を添えてやってボールを投げてやった。上手い具合にボールは相手チームの一人に当たった。

「ほら、当たった。さあさあ、中に入った入った」

ロダンが陣地に入っていくのを見届けると俺は別のチームに参戦に行った。

翌朝、ロダンの姿が学校になかった。不審に思いながらも朝のホームルームを終えて職員室へ戻ると、学年主任と教頭が穏やかならぬ顔で近寄ってきた。職員室の奥に視線をやるとロダンとその母親らしき女が来客用のソファに座っていた。俺は胸騒ぎを覚えた。

「一体どういことなんです。嫌がる子に無理やりドッチボールをやらせるなんてっ。」

ロダンの母親はロダンとそっくりなネズミのような前歯を突き出しながら、ヒステリックにキイキイ、キイキイと喚きちらした。

「いや、自分はですね、他の子と早く打ち解けてもらいたくて」

「皆に寄ってたかってボールをぶつけられてたっていうのに、先生気づかなかつたんですかつ。それになんですか学級委員だって、先生が顧問してらっしゃる野球部の生徒を勝手に先生が指名したそうですわね。それって鼻肩じゃないですか」

「それはあ、三年生にもなるとクラス委員なんて、」

「すみません、軽率でした。改めて生徒達の意見を取り入れてということで」

言いかけた俺を学級主任と教頭は押し留めるように謝罪の言葉を並べた。

確かに説明するだけ無駄なのかも知れない。この手の母親はちょっとしたでも自分の子供が蔑ろにされていると感じると人の意見など聞かずにひたすら攻撃するのだ。

俺はヒステリックに捲くし立てる母親と学年主任と教頭の遣り取りを白けた思いで聞きながら、ふと母親の傍らに座るロダンに目をやった。

そして驚いた。

ロダンは、笑っていた。

ペコペコ頭を下げる学年主任と教頭を見て、僅かだったけど口角を上げて笑っていた。

「ウチの子がいじめられていることを先生方は、一体どの程度把握

してらっしゃるんですか。新しい学年が始まってまだ三日だっていうのに、もう教科書は破られて机も落書きだらけだっていうし……」
机、落書き……何か引つ掛かる。

そもそも昨日だって、俺はそれぞれのチームに均等に参加していた。ロダンが集中攻撃を受けているのを気づかないなんてことがあるか。

「申し訳ありません。早速いじめの実態についての調査を致しまして、また学級委員に関しましては、再度選考しなおすということでは……」

「いや、」

それまで黙っていた俺が突然声を発したので、母親も学年主任も教頭も一斉に俺に注目した。

俺はロダンの方へ向き直り、正面から見据えた。

ロダンは笑いを引つ込めて、俯き加減に目を泳がせた。

「お前、学級委員やってみないか」

ロダンの泳いでいた視線が止まった。

「き、君、一体何を」

突然ひらめいた悪魔的な考えが俺の口を借りて流れるように語りだされた。

「クラスの皆に彼を認めてもらうにはそれしかないですよ。それに彼はいじめられる子の気持ちの方が誰よりも理解出来る。僕もね、お母さんがおっしゃるようにいじめなんてないクラスにしたいんですよ。彼と一緒にそんなクラスが作れるような気がする。もちろん、僕がしっかりサポートして行きますから」

母親は初め呆気に取られたかのようにポカンとしていたが、やがて俺の言っている意味を噛み締めるように言った。

「そうですね……この子、心の優しい子だから、相手の気持ちになって考えることが出来るという意味では、案外、学級委員に向いているかも知れませんね」

バカ親が。今まで一度も褒められたことがないんだろっなあ、可

愛い我が子のことを……。

「よしっ、一緒にいいクラスを作っていこう」

俺はロダンの腕を掴んで言った。

ロダンは俺の目を見つめていた。

俺の真意を何とか見極めようとするように……。

「さっそく、お前の机の落書き、落とさなきゃな」

ロダンの顔にその日初めて、怯えの色が浮かんでいた。

その日、帰り際クラス日誌を置き忘れたことを思い出して俺は教室へ寄った。外は暗く、生徒は皆帰宅して校内は静まり返っている。俺は何気なくロダンの机に目をやった。

新品とは言い難いが落書きなどされていない。

去年のロダンのクラス日誌を読むと担任はロダンの事を「虚言癖がある可能性あり」と書いていた。

更に去年同じクラスだった野球部の田村にロダンの事を尋ねてみた。

「いじめってほどの事はなかったです。アイツちょっといじられるとすぐに母親に言いつけるんですよ。だから皆にウザったくて、相手にしなかったっていうか」

いじめる価値もない。だから狂言でいじめられてる振りしてるってわけか。

ロダンの染み一つない机を見ると、職員室で見たロダンの笑い顔が思い出された。それにロダンの母親に怒鳴られている俺を見る周囲の憐れむような視線。

「……バカにしゃがって」

気づいたら俺は油性マーカーでロダンの机に大きく「死ね」と書いていた。

我に返って自分が書いた落書きに驚いたけど、すぐにまあいいかって思いなおした。

だ・つ・て・え、もともと落書き、されてたんだろ。

ロダンを学級委員に任命したのは予想通り全くの人選ミスであった。

面と向ってまともに人と話すことすら出来ないロダンにクラスの皆を引率して教室移動させたり提出物を集めたりなど出来るはずもなく、クラスの業務はいつも遅れ気味だった。

結果、副委員の水野がブータレながらロダンの分まで業務を行なう。水野は以外に責任感が強いらしく、しかも気の強さと誰に対しても物怖じしない性格が良かったのかどんどんクラスを統率していた。

俺はクラスのみんなの前でおおげさなくらい水野に感謝の言葉を掛けた。

悪かったな。水野がいて本当に助かったよ。アイツのお母さんがさ、いじめられてて心配だっていうから仕方なく委員に選んで、まあ正直役不足だとは思ってたんだけど、水野がここまでしてくれるとは……。

それでクラスの皆が思っていた疑問は氷解するワケさ。

またアイツが母さんに文句つけて、自分をクラス委員にしてくれて頼んだらしいぜって。

いや、水野のフィルターを掛けるとこうなる。

―ふざけんなよ。何にも出来ねえくせに。何で私がさあ、コイツの尻拭いしなきゃなんないワケ。しかも謝りもお礼の言葉もナシだよ。そんなんでさあ、アイツが学級委員でアタシが副^{サブ}なんてム力つくよっ―

水野の言葉はクラスの言葉だ。

水野の苛立ちはどんどんクラスに浸透していく。

―アイツって母親がウザいからさあ今まで放置してやってたけど、最近チヨ―シこいてねえ――キモいくせによお、一体何様のつもりだよ―

そんな風にクラスの中でくすぶっていた不満を、俺はあるホーム

ルームの時間に一気に方向付けた。

「今日は写生をするぞ」

クラスは即座にブーイングを飛ばしたが、俺は紙を配り皆の机を中心に向かせるよう指示した。

「センセー、一体何描くんですかあ」

「うん、誰かにモデルになってもらおうかな。そうだなあ、」

俺はワザとらしくクラスを見渡した。

「やっぱり、学級委員長、かな」

クラス全体が「やっぱり」と「一体なんで」という表情に包まれた。

「さて、どんなポーズしてもらおうかなあ。せつかくだからスケッチしがいのあるポーズがいいよなあ」

俺はロダンを中心に置かれた机の上に上がらせると顎に手をあてて考えるフリをした。

「センセー、これなんてどうですかあ」

水野が美術の教科書のページを開いて言った。水野が指差した先は……もう分るだろ。

「おっ、いいなあ、それ。委員長。ちよつとやってみるよ」

「えっ……」

ロダンは恐る恐る顎に手を添え、膝をイスに座っているように中腰に曲げた。そう、ロダンの「考える人」のポーズ取らせたんだ。

「さあ、皆、描いた描いた」

言いだしっぺの水野でさえポカンと口を開けていた。そのままクラスの皆は戸惑いつつも写生を始めた。そして十分、二十分……。

「おいおい、モデルなんだから。動くなよ」

やがてロダンはプルプルと太ももを震わせ始めた。その頃になってクラスの皆は俺の意図に気づいたようだった。そして三十分、四十分……。

「ちよつとお、動かないでよお」

「そうだよ、全然描けないじゃん」

「自分が言いだしつぺのくせに」

「え、そうなんだ。自分がモデルになりたいって言ったの」

「っていうか、今日のホームルーム写生にするようにって、また母親使って先生脅したんじゃないのお」

クラスのロダンに対する苛立ちが表面化した。

中学も三年になると、受験勉強のストレスを皆溜めこんでいる。

しかし部活を引退して身体を動かすことも出来ない。恋愛にうつつを抜かしている場合じゃない……皆ストレスの捌け口を無意識の内にどこかに求めているのだ。

手っ取り早くストレスを発散させるのには「いじめ」が打ってつけだ。

彼らにしてみれば別にロダンでなくても良かったのだ。

ただロダンは先生に煙たがられている。先生に恨みを買っているあの、うるさい母親に密告したりしたから。だから先生はロダンをいじめたって僕らを怒ったりはしない……ロダンは先生公認の「いじめられっこ」なのだ。

授業終了のベルが鳴ってやっとロダンはモデルから解放されたが、足に力が入らないのか這うようにして自分の席へ戻っていった。

クラスの皆がロダンをいじめるにあたっていくつかの不文律があった。

それは「身体に跡を残さない」「持ち物に手を出さない」そして「金を強請らない」。

これだけ守っていればいじめはなかなか立証できない。そして制約がある中で行なわれるいじめはより陰湿で根の深いものになっていった。

生きたミミズを食べさせる、お詫びの言葉で黒板を埋めつくす、口を開けて立たされて人が吐いた唾を痰壺のように受けさせる……。ロダンの母親にはマメに電話の遣り取りをした。

「クラス委員になって大変そうだけれどもよくやってくれています。

責任感が強い子で一生懸命になりすぎて少し疲れているようです。家ではゆっくり休ませてやってください」

意外な事にロダンは本当に自分がいじめられている事実は母親には話そうとはしなかった。 変なプライドがあったのかも知れない。

いじめの中でもお詫びの言葉を書かされるとというのが地味に見えて、一番精神にこたえるいじめだった。

ホームルームの間中、ロダンは黒板にお詫びの言葉を書かされた。そしてあと一步で黒板が埋めつくされるというところで何だかんだと理由をつけられて消されてしまう。

一からまたやり直すと、延々と繰り返らせる。永遠に終わらない。

そして言葉はやがてお詫びではなくて自己批判の言葉に変えられた。私は最低な人間です。虫ケラです。卑屈で卑怯な人間です。生きていく価値はありません……そして後一步のところで黒板消しで消される。

初めの内は消されるとロダンは驚いたような、呆気に取られた表情を見せていた。

しかし何回か続き出すと消される直前で身体をビクリと震わせるようになった。

「まだ書き終わってないだろう」

そうクラスの人間に責められ、ロダンは休み時間でも放課後でも延々と自分を批判する言葉を書かされた。

その内、ロダンは何も言われなくても自ら黒板に向って書き続けた。

やがてロダンは黒板がいっぱいになるとすると自ら黒板消しを持って消し、また書き始めるようになった。

そんなある日、ロダンの母親から息子がまだ帰ってこないのだと連絡があった。時計を見ると夜十時を過ぎていた。俺はまさかと思

いながらも教室を覗いてみた。

ロダンは書き続けていた。

僕は犬畜生より劣る人間です。害虫です。排泄物です……。

「何やってんだ。もう帰れ」

声を掛けてもロダンは無視して黒板に文字を書き続けていた。俺はロダンに近づきチヨークを持った手を掴み上げた。そうしてロダンはやっと俺の方を見た。

その時の奴の顔……。

ロダンの目は完璧にイッてしまっていた。

「も、う、止める」

さすがの俺も気持ち悪くなった。

「もう、書かなくていい。もう終わったんだ」

ロダンは何が起こっているのか理解できないという風に不安げに目玉をグルグルと泳がせた。

「もう書かなくていいんだよ。分ったらさっさと帰れっ」

俺は一刻もその場にはいたくなくて教室を逃げるようにして出て行った。

そして翌朝、ロダンが教室の窓から飛び降り自殺しているのが発見された。

「この話、間違っても口外しないで下さいスよ。ここだけの話でことで」

若い男は話を掻き消すように目の前のローソクの炎を吹き消した。

「誰も、いじめが原因だとは思わなかったの」

「さすがに学校関係者は気づいてましたよ。でもさ、いじめの証拠がない。身体に怪我もしてない、持ち物だって壊されてない、金をカツ上げされたわけでもない」

「おまけに黒板には自己批判の言葉……ノイローゼと見るのが自然だな」

テーブルの上が後味の悪い空気に包まれた。ただ話の当事者である若い男だけが得意気な笑みを浮かべている。

「母親は？ 何も言ってこなかったの」

主婦らしき女が眉をひそめながら尋ねた。

「何も。それどころか感謝されたよ。クラス皆で葬式に参列したのがよかったんだろうな。齒の浮くような内容のお別れの手紙を副委員に朗読させて……こんなにたくさんのお友達に見送られて息子は幸せものです、だって。笑わせるよな」

悪びれるどころか死者の家族を嘲笑してみせる男に対して、主婦らしき女は嘆かわしげに首を左右に振った。

「あなたみたいな人が教師だなんて、恐ろしい世の中だわ」

「教師だつてね、大変なんスよ。ちよつとでも弱味を見せれば生徒や親につけ込まれる。まあ、世間知らずな専業主婦には分らないでしょうけどね」

若い男の言葉に主婦らしき女はカチンと来たのか、表情を怒りで強張らせた。そのあまりの形相に他の三人は不穏な空気を感じた。主婦らしき女は若い教師に向って言った。

「世間知らずですって。ええ、ええ、確かに私は世間知らずな専業主婦ですよ。でもじゃあ逆にあなたは専業主婦の苦労が分つて？

毎日毎日家族のためにご飯を作って洗濯して、感謝の言葉一つ掛けてもらえないどころか、おかずにケチつけられる。子育てに協力してくれたこともないくせに、息子の成績が落ちれば私の責任。そうやって大事に、大事に育てた息子は嫁の味方ばかりして私を軽んじるようなことばかり言う。そして姑よ、姑っ。嫁に来て以来私をさんざイビリ倒してきて、私が一般家庭の出だからってさんざ人の実家をバカにして」

自分の感情をコントロールできない状態に陥ったのか女の口からは恨み言がとめどなく溢れ出た。主婦の過剰なまでのヒステリック

な反応を三人は戸惑うように見つめていた。そして背広姿のサラリーマンが何とか彼女を宥めようとした。

「そうですよ。あなたが言うように家の中で何が起っているか、その実体を知っているのはあなたしかいない。閉じられた世界であればあるほど、ご主人も息子さんも知らない生活がそこにあるでしょう。その話を私達に聞かせてくれればいいんですよ」

「そうね……」

主婦はそう言って三人と、そして奥の席に座った老人を見やった。

「でも、誰にも言わないでよ」

三人は返事の代わりに同意するように笑みを浮かべた。不可思議な連帯感すら四人の中には芽生え始めていた。

老人はただ黙って、彼らを見つめていた。

第三話 赤味噌

皆さんが思ってたっしやる通り、私は専業主婦です。高校を卒業してから家の手伝いをしてました。今までアルバイトやパートにすら出たことがない、正真正銘の専業主婦。だから世間知らずと言われても仕方ないわね。

あなた方みたいに職場や、外の世界で受ける苦勞とは無縁だけれども、家にいるものが内で受けるストレスっていうのは案外根が深いものなのよ。あなた方は職場で受けたストレスを外で発散させたり、あるいは家でのもんびりと癒したりすることが出来るかも知れない。とにかく仕事が終われば一時的にせよ、そこから解放されるでしょう。

でも私は違う。

家にいる限り解放されない。

外へ出て一時的に気分転換したとしても、帰る時には出る前に気持ちに憂鬱になる。

家へ帰れば姑の嫌味の一つも聞かなければならない。そして家の中は家の中で、いたるところに嫌味やイビリを彷彿とさせるものがある。

やれテレビの音が大きい、やれ風呂が熱すぎる、やれ埃がたまつ
てる、やれ洗濯物に折り皺が出来てる、やれ、やれ、やれ、
やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、
やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、
やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、
やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、
やれ……。

小さなストレスは解決されないままに心の底に溜まってゆく。そうして溜まって溜まって、澱のように溜まったストレスは、いつしか違うものに变化していく……。

家には私の他に三人の人間が住んでいた。

夫は建築士で私の実家が改築する際やってきた出入り業者の一人だった。その頃はまだ助手のようなことをしていたんだけどほどなく独立してからはメキメキと頭角を現すようになったわ。景気もいい頃だったから仕事はどんどん入ってくるし、夫の事務所はどんどん大きくなっていった。実家の親は娘が玉の輿に乗ったって大喜びしたもののよ。

その反面、家の事は全くおざなりだった。日曜日に家族サービスなんてとんでもない。息子はたまにしか見かけない父親に全く懐かなかったわ。ある意味片親みたいなものね。

それでも息子はすすくとよく育ってくれたわ。私がいうのもなんだけど出来のいい子でね。成績も優秀だったし、今は夫の後を継いで建築事務所を切り盛りしてるの。子供の頃は私の後ばかりついてきてたくせに、今ではすっかり嫁の言いなりで……ああ、それは関係ないわね。

そして問題は夫の母親、つまり私にとっての姑。

京都の老舗の呉服問屋の娘さんでね、初めっから私の事をバカにしてた。京都人特有の底意地の悪さでね、何かっていうと京都人であることをひけらかす。

何でもかんでも「京都ではそないなことしまへんわあ」ってね。

私がちよつと失敗すると「こっちの人はそないするんどすかあ」って、京都を引き合いに出しながらチクチクチクチク嫌味を言い続ける。そんなに京都が好きなら京都へ帰ればいいのに……。

まあ、帰るところはなかったんだけどね。

外の人間には「息子がどうしてもってゆってくれはったから」とか「京都の家も私が余所の土地に移るのは反対してはりましたんやけど」って言うてたけどね、実際のところは体のいい厄介払いなのよ。

姑は夫を早くに亡くしていて、呉服屋を継いだ兄夫婦と暮らして

いたんだけど、その兄も亡くなって……あの女のことだからきつと義理の妹の事もチクチクやったに違いないわよ。

「長い間離れて暮れしてはったんやし、老後は親子で一緒に暮らしはったらあ」ってね。自分が生まれ育った呉服屋を追い出されたのよ。ザマアミロ。

そんな訳で今度は私が押付けられたんだわ。

姑の世話も、姑の嫌味も。

中でも一番嫌だったのは料理にケチをつけられたことだわ。ウチの両親は名古屋出身で、どうもその味付けが気にいらなかったのよ。

私が作った赤だしを不気味なものでも見るような目で見て、一口飲んだだけで箸を置いて言ったわよ。

「こんな辛いもん、よお飲みまへんわあ」

お陰で次の日からは甘ったるい白味噌のみそ汁を作られた。

「こっちの人は塩っぱいのんが好きどすなあ」

姑が漬けたお漬物にお醤油を掛けようとしたらってそう白い目で見られた。

とにかく辛い辛いってね。

悔しい事に夫も薄味が好きだった。

「こっちの人は素材の味を殺してしまうんだよなあ」

時々姑が筍を煮たりなんかしたのをおいしそうに食べながらそんな事を言ってたわ。

二人の言う「こっちの人」っていうのは、私のことなのよ。

専業主婦にとって料理をけなされるのがどんなにプライドを傷つけられることか分かるかしら。

こんな濃い味付け良く食べられるわね、名古屋の人の味覚ってよく理解できない、どうして何にでもお味噌を使うの……私だけならまだしも、料理を通して実家をけなすのは許せなかった。

私のお袋の味をまるで野蛮人が貧乏人の食事かのように貶めた。「小さい頃からこういうのん食べて育ってきたら、やっぱり味覚も

マヒしてしまうんだすなあ」

言葉だけははんなりとしてきれいだけど、言ってることはとてもなく意地が悪かった。

そんなある日、夫が部下達を家に招待したいと言い出した。

「何でも名古屋料理が食べたいらしいよ。手羽先とか味噌おでんとか」

当時名古屋料理がちょっとしたブームになっていて、テレビや雑誌でもよく目にしていたの。

私は久しぶりに料理の腕が奮えるのがうれしかった。だって作ったものをおいしいって食べてもらえるのが主婦にとって最高の喜びなんですもの。

腕によりを掛けて作った料理の数々を私はテーブルの上に並べると、

「すごいですねえ」

「わあ、おいしそう」

テーブルを囲んでいた夫の部下は料理を見た途端、歓声を上げてくれた。

私はうれしいような恥ずかしいような気持ちで彼らが料理を口に運ぶ様子を眺めていた。

しかし……。

「……さすが、名古屋ですねえ」

「う、ん。本場の味は違うっていうか……」

夫の部下の齒切れの悪い言葉や戸惑うような表情に私の心はザワついた。箸の動きも鈍っている。

「無理すんなよ。俺も苦手なんだよ。特にコイツん家は名古屋の中でもとりわけ濃いみたいでさ」

夫にいたっては箸もつけていなかった。
どうして？

いつも通り作ったのに。

そんなに濃いのかしら、私の料理。

普通の人が食べられないほど？

それとも私の舌は本当にマヒしてるんだろうか。子供の頃から濃い味ばかりに慣らされて、ウチの家の料理は普通の人食べられないほど酷い味付けなんだろうか……。

「どおぞ」

気まずい空気を見計らったかのように姑は自家製の漬物やひじきの煮物などを運んできた。

「お口汚しかも知れまへんけど」

夫の部下達は早速姑の作った漬物と惣菜に手を伸ばした。

「うわあ、おいしい」

「薄味だけど、しっかり味が沁みてますね」

「京都って言えば、やっぱりお漬物ですよねえ」

夫の部下達の持つ箸は救いを求めるように姑の惣菜に群がった。

「しょうもないお惣菜しか作れまへんよって、」

言葉とは裏腹に、姑の顔は自信満々だった。

夫の部下達が帰り、一人後片付けをしていた私の目の前にはほとんど手のつけられていない料理の残骸があった。

私はふと、その中の一つを手で摘まんだ。

「辛っ」

思わず顔をしかめて吐き出した。そして恐る恐る他の料理も口へ入れてみる。

「何、これ」

在り得ない……私の料理は全く別物になっていた。

呆然と立ち尽くす私の視界の中に調味料棚が映り込んでくる。私の手は無意識の内に塩の入った容器を掴み引き寄せていた。蓋を開ける。

明らかに減っている……。

塩だけではなかった。砂糖も醤油も、そして冷蔵庫の中の赤味噌

にいたっては半分以上がなくなっていた。

「まさか、お、義母さま、が……」

言葉にして呟いた途端、殺意にも近い怒りがこみ上げてきた。

あの女……人の料理に何てことを……。

気がつくと私は、まだ料理がいっぱい残ったままの皿を思いっきり床に叩きつけていた。

「まあまあ、大きな音やこと、一体……」

水でも飲みに来たのだろう。台所に入ってきた姑は非難の言葉を掛けかけて、止めた。

「スミマセン、オカアサマ。リヨウリガ、タクサン、ノコッテシマッテ」

私は自分でも驚くほど無感情な抑揚のない口調で返事を返していた。

「あ、ああ。大変だったなあ。後片付け、手伝いましょか」

姑も私の口調をさすがに不気味に思ったのか珍しく気遣うような言葉を口にしていて。でも今更、そんな気遣いが私に届くはずもなかった。

「キョウハ、タスカリマシタ。オカアサマノ、オツケモノ」

「足手まといになったらあきまへんから、年寄りはおう眠らせてもらいますわ」

姑はモゴモゴとそんな事を言いながら逃げるようにして台所を後にした。

そうして一週間後、奇跡が起きた。

姑は風呂場で足を滑らせて転倒。救急車で病院へ運ばれた。

一命は取りとめたものの姑には重大な後遺症が残った。

まず腰の骨を折ったことが原因で下半身が全く動かせなくなった。おまけに頭を強かに打ってしまったらしく、言語機能に重大な障害が残ってしまった。

つまり姑は寝たきりになった上に言葉もしゃべれなくなっていました。

民間の介護施設を紹介しようかという医師に向って私は自宅で介護するつもりだと答えた。

「義母は夫と暮らすためにこっちに出てきましたし、それに……それに……」

「病院食じゃあまりに味気ないでしょうから」

姑は不安げな目で私を見上げた。私は笑みを浮かべながらそんな姑を見下した。はたから見れば慈愛に満ちた笑顔だったに違いない。

「ただいま、あ、今日味噌カツなんだ。久しぶりじゃん」

大学から帰ってきた息子はそう言って揚げたてのカツをつまみ食いした。この子は味噌カツが大好きなのだ。

「お祖母ちゃんに夕食持ってた、すぐご飯にするからね」

姑の分をお盆に乗せながら私は笑顔で息子へ言った。

「……ふうん」

息子は何か言いたげではあったが結局何も言わず、勝手に納得した様子で台所を出ていった。

息子の意味深な様子に私もふと手を止めたが深くは考えず、姑の部屋へ食事を持っていった。

「はい、どうぞ」

私はベッドに備え付けられたテーブルにお盆ごと夕食を置いた。もちろんみそ汁は赤だしだ。

姑はみそ汁の入ったお椀をジッと見つめていた。

姑が倒れてからというものはここぞとばかりに腕を奮った。味噌おでんに手羽先に味噌煮込みうどんに牛スジのどて焼き、もちろん味噌カツも……。

姑の分は別の鍋で特別に濃い味付けにしてみた。

「お義母さま、その方が好きなんですよ。だってあの日、わざわざ

私の料理に味噌を足してらしくらいですものね」

そう言つて私は姑にコツテリした辛いおかずと赤だしを食事に出した。そうしてわざと食後のお茶やお水を出してやらなかった。

息子は元々私の味で育つていたし若さもあつてか、京都風の薄味では物足りなかつたらしく私の料理を歓迎してくれた。しかし夫の箸は進まなかった。

「いい加減、慣れてくれればいいのに」

私は薄味の料理を決して作ろうとはしなかった。姑と一緒に辛い辛いと言つてきたことに対する仕返し of 気持ちもあつたのかも知れない。

やがて夫は外で食事を済ませてくることが多くなつた。それでも私は濃い味の味噌料理を作り続けた。

ある日、家へ帰ると見慣れない女物の靴が玄関にあつた。華奢でキラキラと派手なサンダルで私は怪訝に思いながらも恐る恐るリビングの方へ入つていった。

「あ、おジャマしてまゝす」

若い女の子は私の姿を見て頭も下げずに目だけで挨拶した。会釈をしつつ戸惑いながらも女の子の頭から爪先まで全身に目を走らせる。

ペディキュアで彩られた足を行儀悪くガラステーブルの上に乗せている。黄色いくらいに染められ派手にカールされた髪に肩も露わなキャミソール。かなり腰の位置が低いジーンズからは下着はおるか腰骨さえも出ている。

「あの、一体」

言いかけたところに息子が両手にジュースの入ったグラスを持つてやつて来た。そうして友達だと言つたきりロクに紹介もせずに入して自分の部屋へ上がつていった。

息子が彼女と結婚したいと言ひ出したのはそれから数日後のことだつた。

もちろん反対した。結婚だなんて早すぎるし、第一あんな下品な女の子！

しかし息子は勝手に家を出て彼女と一緒に暮らし始めた。

すると今度は、夫が別れたいと言ってきた。聞けばここ何ヶ月か関係のある女がいるという。

「どうしても合わないんだよ、君の料理」

私は納得しなかった。料理が気に入らないなんて分かれる理由にならない。私は絶対に離婚届に判を押さないと夫に言い切った。

しかし夫は冷たい、蔑むような目で私を見て言った。

「お袋が濃い味嫌いなこと知ってて、ワザと出してんだろ。お前、それって寝たきり老人を虐待してるんじゃないか」

母さんを預ける介護施設も探してあるし、とにかく明日、離婚届を取りにくるから。

何でそんな事知って……夫が再び家を出てしまうと私は慌てて姑の部屋へ行った。

しゃべれないくせに、一体どうやって。

ドアを開けると……姑は、ほのかに笑っていた。

そうして布団を捲くると、布団に味噌で「辛い」と書いてあった。私はドアを叩きつけるように閉めた。そして泣き声とも雄叫びともつかない声を絞り出すようにして叫んだ。

ふざけるなつ。こんなことゆるされるはずがない。今まで散々尽くしてきた私を、料理の味が濃いからって、たったそれだけ、たっただけだけの理由で私を捨てるなんてええええええええええええええええええええええ……。ええええええ……。

散々叫び続けて、私はポツリと呟いた。
「絶対、離婚なんてしない」

そうすると、また奇跡が起こった。

翌日、私は夫に最後の料理を作ろうと思って牡蠣のどて鍋を作った。牡蠣の臭みがなくなって食べやすくなると言って、これだけは夫も好きだったのだ。

途中、息子が自分の荷物を取りにやってきたので牡蠣のどて鍋を持って帰るか聞いてみたがいらないと断られた。彼女がリゾットだか何だか作って待っているのだそうだった。

夫は昨日とは打って変わって私が素直に離婚に応じたので安心してように顔をほころばせた。

「君にも悪いようにはしないから」

そう言って私が作った牡蠣のどて鍋に舌鼓を打った。

そうして夫が家を出て行った数時間後、夫の身体に異変が起こった。

食中毒だった。

二、三日死の縁を彷徨った末に、夫は死んだ。

通夜の晩、警察に少し話が聞きたいと言われた。

「さあ、私が出した牡蠣が悪かったんでしょうか。調べたいと言われましても、残りはとつくの昔に捨ててしまってますし……」

警察は明らかに私を疑っていた。当たり前だ。私の料理を食べた数時間後に異変が起こっているのだから。そうして警察から質問を受けていると息子が駆け寄ってきた。警察は息子にも当日の様子を尋ねた。

「ああ、あの牡蠣のどて鍋ね。アレ、美味かったなあ」

「食べたんですか？」

「ええ、あの日家へ寄った時に母さんが晩御飯のおかずにとって持たせてくれて……リカも食べたよな」

息子は一緒にいた彼女に同意を求めた。彼女はほんの僅かな間、息子の目を見つめて言った。

「うん、食べた。おいしかったよね、アレ」

息子の彼女の証言もあったため、私に対する疑惑は晴れた。結局たまたま夫が食べたのが運悪く毒性の強い牡蠣だったのだろうということで処理された。

「その後、姑も夫の後を追うようにして亡くなったわ」

主婦はそう言って、もうすっかり冷めてしまったコーヒーを啜った。

「それも奇跡が起きたんじゃないの」

モデルの女が探るような目つきで言う。主婦は小さく頭を振った。「ダンナもうるさい姑も死んで、やっと悠々自適な毎日が送れるってワケだ」

若い教師の嘲るような声に主婦は「いえ」と呟いた。

「何か心配するようなことでもあるワケ」

主婦は大きく溜息をついて答えた。

「息子がね、言うのよ。あの時、牡蠣のどて鍋を持って帰っていたらどうなっていたんだろう、って」

三人は黙っていた。

「私、姑の遺産も夫の遺産も相続しているのよね」

主婦の言葉に対して、モデルの女が笑いのない硬い声で言った。

「アナタの身に奇跡が起きたら怖いわね」

主婦は大きな溜息をもう一度ついた。

その溜息でもって目の前のローソクの炎が消えた。

四人目の、サラリーマン風の男が神経質そうに眼鏡を眉間まで上げた。レンズに写ったローソクの炎がユラユラと揺れて、その瞳に浮かんだ表情は見えない。

教師である若い男が待ちきれないように声を掛ける。

「ほら、アンタの番だよ。それもと今更、話すことがないなんて言わないよな」

サラリーマン風の男は汗で身体に貼りつくシャツの袖を大きく捲くった。さすがに背広はもう脱ぎ捨てておりだらしなく緩めたネクタイが首に引っ掛かっているだけである。

若い教師に声を掛けられてサラリーマン風の男は微かに、しかし確かにニヤリと口角を上げた。そしてその乱れた着衣とは正反対の折り目正しい物腰でテーブルに肘をつき組んだ手に顎を乗せた。

「もちろん。むしろ僕は、この話をずっと誰かにしたくて仕方がなかったんだ」

ここにいる五人の中で一番礼儀正しく人あたりがソフトなこの男はその実、どこか酷薄さを漂わせていた。若い教師は相手が自分の挑発にも乗ってこないどころか、全く感情の読めない相手にたじろいだ。

「ただ、絶対に余所では他言しないでいただきたい。これはあなたの方のためでもあるんですよ」

男の眼鏡に写るローソクの炎がザワリと揺れ、生ぬるい風が通り過ぎていった。

「特に、あなた。間違っても旅行へいったついでに……なんて考えないで下さい。この場所は確かな筋の紹介がないと入れない場所ですから」

「もし、口にしてしまったら」

「考えない方がいいですよ」

三人の心の中に不穏さと、そしてそれに反するように強い好奇心が湧き上がってきた。

反するように、という言い方は適切でないのかも知れない。

揺さぶられるほどに好奇心は強くなっていく。

「話してもいいですか」

男は奥のテーブルに座った老人とちょうど対峙する位置に腰掛け

ていた。

奥まっているせいか老人の人相はほとんど見えない。しかし男と同じように組んだ手に顎を乗せた老人の口角が返事をするように少し上がったように見えた。

男は他の三人を見回すように視線を流した。三人もゴクリと唾を飲み込みながらも無言で頷いた。

「人ダルマってご存知ですか」

男の発した言葉に、老人以外の三人は警戒するように頷いた。

「香港のフィッティングルームで奥さんが誘拐されて、って話よね」
主婦は確認するように隣に座るモデルの女に問いかけた。

「そうよ。売り飛ばされた売春宿から逃げ出そうとした奥さんは見せしめのために両手足を切断されて、見世物小屋にいたところを発見されたって」

主婦がおぞましげに顔を歪めた。

「俺はインドで。両手両足を切断した乞食が日本語で「日本大使館へ連れて行って下さい」って話しかけてくる何とか」

若い教師が言った。

「でもそれって、いわゆる都市伝説じゃないの」

モデルの女はそう言い放った。残りの二人もモデルに同意するように何度も頷く。しかし男は涼しい顔で言った。

「都市伝説がまことしやかに語り継がれるのは、話の中に一抹の真実が含まれているからです。そしてこの話の中に含まれる真実と
というのが……」

……人ダルマ。

第四話 人ダルマ

人ダルマと聞くと、おぞましさに耳を塞ぎたくなる人がほとんどでしょう。しかしね、それは見たことがないからですよ。

そもそも人ダルマっていうのは見せしめのためでもなければ、物乞いをするために生み出されたものでもない。

その起源は中国の宮廷人が見目麗しく、それでいて身分の低い娘を囲うために始めたといえます。

普通の五体満足な女を家に置くとすると奥方の手前何かと問題が生じがちですがね、ダルマにすることによってこれは人ではない、置物だと言い訳が出来る訳です。実際きれいに着飾らせて部屋に飾っておいてね、客人に見せてやつたりしたそうですよ。

人ダルマにされるのはさらわれるようにしてやってきた娘がほとんどなので、口封じのために舌を抜かれたり喉を薬品で焼かれたりで言葉を発するが出来ないようにしてしまっんですよ。

動けないし話せないじゃあ、確かに置物と変わらないかも知れませんがね。

西太后が皇帝の寵愛を受けていた女官をダルマにして酒壺に漬けたっていう逸話は有名ですよ。それもこれも、代々中国の宮廷では受け継がれてきたことなんですよ。

更にダルマにしたのにはもう一つ理由があつて、いわゆる女性器の具合が良くなるのだそうです。

中国人ていう人種は皇帝という一人の人間を満足させるためだけにあらゆる快楽を追求し研究続けた民族なんです。元々宮廷内で行なわれていたことが貴族や金持ちの間に広まり、一般民衆にまで広まったのがいわゆる纏足ですよ。

女性を自宅に閉じ込めておくためだとか色々言われているけれど、元々は女性器を鍛えるためなんです。西洋のハイヒールも同じ発想ですよ。

しかし、纏足やハイヒールといったバランスの悪い靴を履く事で下半身の筋肉が鍛えられるというのは分るにしても、両手足を切断したダルマの女性器の締まりが良くなるっていうのは腑に落ちないな。実際、そんなに違いも感じられなかったですしね。

え、試したことがあるのかって？

なければこんな話するはずないでしょう。それこそあなた方が今までに聞いてきた都市伝説と何も変わらないじゃないですか。

思うにダルマ女の持つ美しさとフリークスを抱く背徳感みたいなものが男を興奮させて、そこからダルマ女は名器だっていう神話が生まれたんだと思うんですよ。

え、両手足を切断された女のどこが美しいんだって？

あなた、バカだな。「美」っていうものを全く分ってない。

手足が切断されている、イコール、醜いっていう発想は一体どこから生まれてきたんだろうな。全くナンセンスにもほどがある。だったらルーブルに展示されてるサモトラケの二ケ像や ミロのビーナスはどうなんです。

あれはね、欠けている部分があるからこそ美しいんだ。

完璧なものが美しいとは限らない。不完全さっていうのは人の心を揺さぶるんだ。

胴体と羽だけになっても前へ進もうとする二ケの力強さ、そして乳房を隠す腕を持たないビーナスの無防備さ……もしビーナス像に腕があつたらただの凡庸な彫刻にすぎなかった。

ビーナスは破損した結果あなつた訳じゃない。人為的にね、切られたんですよ。

作者は初めから腕のない女の像を作ろうと思ったんですよ。きつとそうに決まっている。

前置きが長くなりましたね。本題へ移りましょうか。

まず、自己紹介から始めましょう。私は某大手ホテルチェーンの開発部海外部門というところに所属しています、主な仕事は新し

いホテル建設の候補地の視察といったところでしょうか。

そう、この島へ来たのもそれが目的です……まあでも、ここはナシだな。日帰り客ばかりで泊り客は望めない。おまけにインフラ事情はサイアク。

そんな訳で海外出張ばかりですよ。月に一週間も日本にいればいい方かな。

結婚？ していますよ。子供はいません。

僕はね、欲しかったんだけど、妻が「あなたは出張ばかりで私一人で子育てするなんて嫌よ」ってね。まあ当然といえば当然の反応なのかも知れませんか。

ええ、ええ、夫婦仲は芳しくなかった。

それでもね、僕は妻の事を愛してましたよ。もちろん今だって……。

僕が人ダルマと出会ったのはタイだった。当時チェンマイでは滞在型のリゾートホテル建設が盛んでね。ウチのホテルも現地のホテルチェーンと提携して大型リゾートホテルを建てる計画が持ち上がっていた。検討を重ねた結果、候補となるホテルチェーンは二つに絞られていた。僕はそのどちらと提携を結ぶか視察のためチェンマイを訪れた。

それにしてもまあ、彼らの接待攻撃はすごかった。どちらも自分のホテルを選んでもらおうと必死だった。ウチはかなり後からの参入だったからね。めばしい日系のホテルはすでに余所のホテルと提携を結んでしまっている。彼らにとっては日系のホテルチェーンと提携を結ぶ最後のチャンスだったという訳ですよ。

それにしても僕ほど接待のしがない相手もいなかっただろうな。

僕はゴルフは好きではないし、洋食が好きだからタイ料理はもちろんのこと、フカヒレやツバメの巣といった高級食材をつかった中華料理も大して嬉しくはなかった。そもそもタイの地方都市で食べる中華のレベルなんて香港と比べるとずっと低いし、フレンチやイ

タリアンに至ってはお話にならない。

こんな風にゴルフもダメ、料理もダメとくると奴らが次に仕掛けてくるのは「女」だった。

カラオケラウンジに連れて行つては気に入った女がいなかったのか、マッサージパーラーへ連れていく。もちろん性的なマッサージを行なってくれる店だ。俺はウンザリしてマッサージパーラーの女にチップを渡して店を出た。そうすると次は若い男が裸で踊っているゴーゴーバーだ。もう勘弁してくれよ。

もちろん僕にだって性欲はあるさ。妻以外の女とはセックスしないなんて聖人めいたことなんて言うつもりもない。特に僕は仕事柄、外国で接待を受けることも多かった。

人間の快樂っていうのは結局のところ食欲と性欲さ。

出張先でそういったものを楽しまなかったのかと言えば嘘になる。役得とばかりに僕はそれらの快樂を貪った。世界中の美味と美女を味わった。世界中のあらゆる快樂を味わいつくしてしまった。

その結果分ったことは日本で食べるフレンチやイタリアンが一番おいしいということ。

そして、どんな娼婦よりも妻が一番素晴らしいということだった。

何を与えても満足しない僕に対して相手は、一体何が好きなのか、何を望んでいるのかをしつこく尋ねてきた。僕もいい加減ウンザリしていたので相手に胸の内を打ち明けた。

「傲慢と思われるかも知れないが僕は、どんな美しい娼婦に対しても幻滅しか感じないんだ」

「それは、悲しいことですね」

その男は注意深く僕の話聞きながら何か考えているようだった。そうして、

「料理に関してはあなたを満足させてあげられるようなレストランはここにはないでしょう。しかし、「女」なら満足させてあげられ

るかも知れない」

僕は無駄だと首を左右に振ったが、その男はもう一度だけ自分にチャンスをくれと言って引き下がらなかった。

「ともかく相手にコンタクトを取ってみます。それからこの事は絶対に他言しないでください」

何一つ教えてくれずに他言も何もなかったものだ。男はどこかへ電話をし、何やら話し込んでいたがやがて電話を切って笑顔を見せた。

「大丈夫ですよ。明日のゴルフはキャンセルしておきます。では、一〇時にロビーで」

男はそう言って帰っていった。僕は溜息をつきながらも、たまには酔狂につき合ってみるのも悪くはないと自分に言い聞かせてベッドに入った。

翌朝、ロビーで待ち合わせた男と共に車へ向うと、そこには4WDの車が止まっていた。一体どこへ連れて行くつもりなんだろう。僕は半ば投げやりな気持ちで車に乗った。

男の運転する車はチェンマイの街中を出て郊外へ入っていった。そうして一時間ほど走ったところで脇道に入り山奥へと入っていった。車はアスファルトで舗装されていない道をどんどん奥へ進んでゆく。そして途中、小さな村落で車を止めるとここから先はトウクトウクしか入れないと行った。

未舗装な道を揺られながら二〇分ほど走ってゆくと、再び小さな村落に出てきた。いや、村とも言えないかも知れない。そこには大きな母屋のような建物が一軒と離れのような小さな建物が数件立っているだけであった。

離れにはそれぞれ家族が住んでいるようで、開け放たれた窓からは赤ん坊がハンモックで揺られている様子が見え、表では縫い物をする女の姿やニワトリを追い掛け回している子供達の姿が見られる。一見したところ、ごく普通の山岳民族の集落といった光景だった。

ただ異様なのは奥にある大きな母屋のような建物で、正面の窓はおろか扉も来るものを拒むように固く閉ざされていた。

僕を連れてきた男は傍らにいた女に何やら話しかけた。女は頷くと母屋へ入っていき、しばらくして入ってくるように手招きした。

僕を連れてきた男は目で僕に入るよう促した。僕は不可解ながらも一人建物へ近づいていった。

僕を中へ入れると女は外へ出て、ガチャリと鍵を掛けた。

僕は不安を胸に抱えながらあたりを見渡した。

白い煙が部屋中に充満して視界を遮っていた。

しかしやがて目が慣れてくると部屋の全様が見渡せた。

中国風の調度品でまとめられた室内には何脚もの天蓋のついたベツドとクツションが置かれ、東洋人やなかには西洋人の男も、それぞれに寛いだ格好でキセルを吸っていた。

僕はそこが阿片窟なのだと直感した。さすがに怖いような気もしながら、どこかで「こんなものか」とも思った。

「こんなものか」というのはつまり阿片窟自体と、そして男が話していた快楽の実体へ対してだった。大方、阿片を吸って行なうセックスの事を指していたのだろう……僅かに抱いていた期待は途端に失望へと変わっていった。

突っ立っていると奥から年老いた小柄な男が現れた。身なりはキチンとしていて見るからにインテリ層といった雰囲気の人だった。僕はホッとして老人に自分は阿片には興味がないのだと英語で伝えた。老人は僕の言っていることを理解した上で奥へ来るよう促した。僕は黙って老人の後をついて行った。

奥は幾つかの小部屋で別れていた。

扉は観音開きになっていて凝った彫刻が施されていた。

女に客を取らせる部屋であることは一目瞭然だった。

扉を閉めるために横に通された木を外すと老人は扉を開け放して僕に入るよう手で招いた。

そうして扉の前に立った僕は思わず息を呑んだ。

目の前には十代と思しき少女が佇んでいた。
外の光に当たらないせいかその肌は陶磁器のように白く輝いていた。

少女はとてつもなく穏やかな笑みを浮かべていた。
しかしその穏やかさは少女の置かれている状況からするとかなりアンバランスなものであった。

そう、少女には手足がなかった。

老人は静かに扉を閉めてその場から去っていった。
私は少女に近づいた。

少女は笑みを浮かべたまま私を見上げ、何か言うように口を動かした。

私は何を言っているのだろうと少女の顔に耳を近づけた。
そして気がついた。少女は声が出せないのだということ。

私は俄かにその少女に対して愛情めいたものが湧き上がってくるのを感じた。

そうして私は少女を自分の方へ引き寄せた。少女はバランスを崩して私の膝に倒れ込む。そんな仕草の一つ一つを私は自分でも驚くほどに愛らしいと感じた。

そんな手足のない少女とのセックスは私をいつになく興奮させた。
手足のない身体で私を受け入れる様はまるで彼女が私とセックスするためだけに存在してくれているようで、私のなかの独占欲を満足させた。

そう、手足がない女というのは男の本能の根源的な部分にある独占欲や征服欲といったものを刺激し満たしてくれるのだ。

声が出ないため文句も言わず、それでいて胴体だけを使って色々な事を訴えかけてくる。ふと彼女の訴えに心を傾ける。少女は恋する以上に切実な視線で私を見つめている。

そう、少女には私しかない。

この少女が生きていくためには私を受け入れざるを得ない。肉体的自由を失ったこの少女の生与剥奪権を今この瞬間、握っているのは私なのだ。

私は「神」なのだ。

手足のない少女にとって私は神と同等の存在なのだ。

畏怖と慈しみ。

少女は聖テレジアの法悦のごときエクスタシーの表情を浮かべていた。普通のセックスでは得ることのない精神的な充足感。肉体をも越えた究極の快樂がそこにはあった。

泊まっていくなと尋ねられたが翌朝は打ち合わせがあったので、後ろ髪を引かれるような思いで阿片窟を後にした。

帰る道すがら男は色々な話をした。

あの老人は宮廷のお抱え医師の末裔なのだ。お抱え医師といってもあのような人ダルマの手術を施したり妖しげな媚薬を作るのが専門で、清朝が滅んだ際、その仕事内容のおぞましさをから国を追われ逃げるようにタイに流れついたのだと。

大っぴらに開業が出来る内容の仕事ではないがそれでも需要はあるらしく、あのような山奥でも沢山の金持ちが後を絶たない。

特にこの辺りはゴールドントライアングルに近いこともあり、多くの村落で非法のケシの花が栽培されている。老人が栽培した阿片は質が良く、モルヒネやヘロインも精製しているので現在はそこから目当ての客がほとんどなのだそう。

そして阿片は人ダルマにも用いられる。

普通の人間であれば両手足を切断されて正常でいられるはずもない。人ダルマにされた人間が狂気に陥らないように定期的に阿片を吸わせているのだ。

あの少女の穏やかな恍惚とした表情も阿片によるものだったのだ。それでも僕あの少女に対する思慕は何ら変わらなかった。私はチェンマイへ行く度に少女の元へ通った。

そうして二、三ヶ月が経った頃だった。

出張の合間を利用して僕はあの山奥の阿片窟へ訪れた。通い慣れた勝手知りたる建物の中を奥へと進み少女の部屋を開ける。

しかし、そこに少女の姿はなかった。

一体どういう事だと振り返ると背後に老人が突っ立っていた。

彼は少女が死んだのだと僕に告げた。

落胆を隠せない私に老人は言った。

人ダルマは定期的に阿片を摂取させていることもあって元々寿命が短い。特に成人女性であればもっと長生き出来たかも知れないが、あの少女はまだ成長しきっていない状態で手術を受けたので通常以上に弱るのが早かったのだと。

僕は他には人ダルマはいないのか老人に尋ねた。しかし老人は虚しく首を左右に振った。

人ダルマは手術もだがその後のケアにも手間と金が掛かる。フリークス専門の売春宿などにいる人ダルマはズサンな手術を受け、口く治療も受けないままに店で多数の客を取らされる。そのため肌や髪の色艶も悪く、もちろんまともな精神状態の者などいない。おまけに醜い手術痕だつて残っている。そうして散々に客を取らされ酷使される。彼女らは長くて二、三年、早ければ一月も立たない内に死んでしまうのだという。

この老人にとって人ダルマは金儲けの道具というよりもむしろ自分が作りあげた作品であつたのだ。

先祖から代々受け継がれてきた技術を駆使して作り上げた芸術品。手足を切断した痕は全くとっていいほど残っておらずツルンとしていて、まるで初めから手足など生えていなかったかのような仕上がりであつた。その芸術作品を維持するために阿片だけでなく、健康状態によつては様々な漢方薬を与え世話をし続けてきた。

近く人ダルマを作る予定はないのかと僕は老人に尋ねたが芳しい

返事は得られなかった。

当たり前だ。人ダルマにされる女はまともなルートでは手に入らない。それに誰でもいいというわけでもない。老人にしてみれば自分が納得のいく作品を作り出すためにはやはりいい素材を使いたいのだ。僕だって、人ダルマならどんな女でもいいというわけではない。

落胆したものの、僕は諦めた。

また人ダルマを作ったら連絡をするとってはいたが、そんな言葉信じて待ち続けるのも嫌だ。何を失ったわけでもない。今まで通りの生活に戻るだけのことだ。

僕は案外きつぱりと人ダルマの事を諦めることが出来た。

思いのほか仕事が早く片付き一日早く日本へ帰ることになった。

僕は妻に連絡をしてその旨を伝え、久しぶりの我が家へ戻った。

「オカエりなさい」

家に入るなり妙な違和感を僕は抱いた。

何が変わっているわけでもない。しかし何かが違う。

「一応ワイン、買っておいただけ。あなたと違ってあまりワインの事が分らないから……デパートにでもいく時間があればよかったんだけど、近くのスーパーで買ったものだから……」

歓迎されていない……。

僕とまともに目を合わせようとせず台所で夕食の準備を始める妻を見て僕はそう感じた。

「商談が呆気ないほど早く成立して……連絡が遅くなって悪かったな。予定があつたんじゃないか。友達と会うとか」

妻はシンクから顔を上げて僕を見た。

「予定なんてないわよ。大丈夫よ、心配しなくて」

そう言っ取り繕ったような笑みを浮かべた。

違和感を抱きながらも僕は何も聞かずに妻と食事をし、早々とベッドに入った。妻は用事を済ませてからと言って、二時間ほど経っ

てから寝室に入ってきた。

「まだ起きてたの」

「ああ、時差ボケのせいかな」

そんな会話を交わしながら布団に入ってきた妻を僕は当然のように求めた。しかし妻はそんな僕を拒んだ。

「ごめんなさい、生理中なのよ」

僕は「そうか」と言って引き下がった。僕は妻の生理が毎月いつ頃あるのか知らなかった。しかし確認するつもりなど毛頭なかった。生理中であろうとなかろうと妻が僕を拒んだという事実には変わりはない。

ほどなく妻は軽い寝息を立て始めた。

その寝顔は穏やかで美しい。

ふと暗闇の中で何かが発光しているのが見えた。目を凝らしてみると、どうやら妻の携帯にメールの着信があったらしい。音は切つてあったが着信を知らせるように携帯は二、三度瞬いた。

こんな夜中に、一体誰だろう。

そう思いながらも妻の携帯の中味を見るつもりは全くなかった。メールの相手が誰であろうと、そんな事はこの際、重要ではなかった。

子供もいない、夫もロクに帰ってこない彼女はあまりにも自由で、それに対して僕はあまりにも無力だった。

仮に今、妻が浮気をしていなかったとしても、この先彼女が他の男と浮気する可能性は無限にある。彼女は十分に若く、まだ十分な美しさを保っている。他の男と人生をやり直すことだって簡単に出来るだろう。

妻が自分の元から離れてゆく。

その想像は僕を激しく動揺させた。

妻が僕の元から離れてゆく。そんなの絶対ダメだ。許せない。受け入れられない。

でも……一体どうすれば妻を自分の手元に縛り付けておくことが

出来るのか……。

僕は傍らでスヤスヤと眠っている妻を見た。

美しい腕が布団を抱えるように横たえられている。

美しい……が、必要ないんじゃないか。

僕は妻を凝視した。

僕の中で一つの考えがまるで水の中に墨汁を落としたかのように黒く広がっていった。

妻は何も知らず寝息を立てていた。

そして一カ月後。

妻はチェンマイへ旅行中、ショッピングに出掛けたきり、二度と戻らなかった。

「誤って、フィッティングルームに入ってしまったのかも知れないな」

サラリーマンの男はそう言って目の前のローソクを消した。

こうして四人の話が終わり、最後に一人、老人が残った。食堂の至るところに置かれてあったローソクはいつの間にか消され、従業員達もいつの間にかどこかへ行ってしまった。

老人の前にあるローソクだけが一本、ユラユラと不気味に炎を揺らしている。俯き加減の老人の顔ははつきりとは分らない。しかし、一番奥の席に位置しながらも圧倒的な存在感を漂わせている。

「遂に、最後の話ね」

四人は怯えるような、それでいて何かに憑かれたような視線を老

人に向けた。そうして老人が口を開くのを今か今かと待ち構えていた。

「私は……」

じれったいような間がしばらく流れた後、ようやく老人が口を開いた。

「皆さんが、ここに集まるべくして集まったのだと、確信しました」
バサリツ、と大きな風がビニールシートをはためかせた。四人は思わずビクリと身体を震わせる。

「七三一部隊をご存知ですか？」

老人の声は抑えられたものではあったが、まるで直接脳に語りかけられているかのように響いてきた。

「あ、あの満州で大量の人間を使って残酷な人体実験をしていたっていう」

「マルタって呼んでたんだろ。木材の丸太から取って」

老人は同意するように薄い笑みのようなものを浮かべて言った。

「我々はね、ザコと呼んでましたよ。ホラ、この辺りの海でね、釣りをするとも幾らでも釣れるんですよ、雑魚みたいな小魚がね」

そう言って老人は小さなガラスの小瓶を懷から取り出し、テーブルの上にコトリと置いた。

第五話 細菌兵器

戦争と人体実験というものは切つて切れない関係なのかも知れませんが。ナチスがユダヤ人を、冷戦時代のソ連が政治犯を使つて行なつてきたように、人間は大義名分さえあればいくらかでも残虐になれる生き物なんでしょう。

それがあつたから医学の進歩があつた？

医学の進歩どころか、大量に人を殺すための実験ですよ。いや、すでに敵を大量に殺すためという当初の目的からも外れていましたな。

はたでみているとね、まるで子供がセミやバッタの頭や手足をもいで遊んでいるように見えましたよ。

頭をもがれた昆虫がそれでも飛んでいくのを見て笑っている子供のようにね。

その罰として我々は原爆を投下されたのかも知れん。あれはれっきとした人体実験ですよ。放射能が人体に与える影響は海上で行なわれる核実験だけでは分らないですからな。

私が戦争へ召集されたのは二〇歳の時だった。当時、帝国大学で医学を学んでいた私は軍医の研究助手としてこの島に派遣された。私が派遣されるほんの二ヶ月前に占領した島だというのにコンクリートで出来た立派な研究室や宿舍がすでに建てられていた。

島の原住民たちは皆おとなしく温厚で、無気力なくらいに抵抗する様子もなく日本兵の横暴にされるがままになっていた。

ホームシックもあつたのだろうか。娯楽もない南の島で日本兵の多くは原住民達を虐待することでしか溜まったストレスを発散することが出来なかった。天然パーマの髪の毛に火をつけて誰が一番早く海まで辿り着けるか競い合わせたり、兄弟や親子を自分達の目の前で交わらせたりなんてのは日常茶飯事だった。

兵として派遣されているとはいえ南の島は戦地から遠く離れてお

り、特に二等兵達は自分たちの存在意義を全く失ってしまった。彼らはいつの間にか原住民を虐待すること自体が日本国の威信を知らしめることになる、つまりお国のためだと言って目的をすり替えてしまっていた。

本来の目的を見失ってしまったのは何も二等兵だけではない。

私の直属の上司である軍医もまたその一人であった。いや、彼は医者であつた分、更に性質が悪かった。

外科医というのは医者の中でもとりわけ人間を単なる物とみる傾向が強いのかも知れません。

優秀な外科医としても誉れの高かつた軍医は時折無意味な外科手術を原住民に施していた。内臓を全て取り出してもう一度詰めなおしたり、切断した足の神経一本一本までをきれいにつなげたり……そんな事を麻酔も無しに行なっていた。中には痛みに耐えられずシヨック死するものもいた。

そしてこの軍医が特に開発に心血を注いでいたのが軍の命令でもある細菌兵器の開発だった。

私はこの研究の助手をすることが私の仕事であつたのだが、この細菌兵器がまた恐ろしい代物だった。

元になる菌はそもそもこの辺りの島に伝わる風土病の一種で、伝染すると高熱や下痢による脱水症状が続く。

そして何よりも特徴的だったのが体中に膿の溜まった水泡が出来る点だ。

この水泡が厄介で破れるとそこからバイキンが入り、ただでさえ衰弱した身体は感染症にかかりやすくなる。それがこの病気の死亡率を飛躍的に上げている一因であつた。

この風土病を細菌兵器として完成させるためにはまず感染力をより強くする必要があつた。

元々は患者の吐瀉物や膿を触った手から口内へと感染していくのがほとんどだが、空気による感染も若干ではあるが見られた。軍医

は力ゼなどの空気中の感染力が強い菌と菌を同時に摂取させるなど様々な実験を重ねていた。

こんな風に細菌兵器としての開発だけならば感染力の強さと広がりを高めてゆくだけで十分であると言えた。

しかし軍医は更にこの病気の特徴である水泡と膿より大きく身体中に広げることには執着した。

被験者は菌が空気中に蔓延する密閉された部屋に閉じ込められる。部屋には大きな防弾ガラスが張られてあり、軍医は隣の部屋で被験者の様子を観察することが出来る。

そうして被験者が感染し水泡が出来始めると軍医はその様子を写真に撮り、それこそ水泡の数から大きさから事細かに観察し記録した。

一体どんな風に菌を開発したもののか、感染力の方はなかなか開発が進まなかったにも関わらず、被験者の身体に出来る水泡の数はより多く、より醜く彼らの身体を覆っていった。

確かに考えようによっては、皮膚を覆う不快感というものは本人にとっても周囲にとっても戦意を喪失される効果があるのかも知れない。

しかしこの軍医の場合は違った。

彼は実に個人的なパラノイアでもってこの研究を進めていた。

その証拠に、彼は被験者に若い女性しか使わなかった。

あまりに陰惨な光景に軍医に意見したこともあった。しかし軍医は若い肌でないと水泡の出来具合が観察しづらいと言って全く取り合ってはくれなかった。

被験者が死ぬと新しい若い女性が補充された。感染してから死ぬまでの間は数日から一週間といったところだろうか。

一度、軍医は死ぬ間際のまだ少女といってもいい若い女にガラス越しに鏡を見せた。自分の姿をみた女は防弾ガラス越しにも聞こえるような金切り声を上げて気がふれたように自分の顔に出来た水泡を掻き毟った。

当時、私には現地妻と呼んでもいいような存在がいた。原住民の娘で自分の家で採れた野菜や玉子をいつも研究室に運びにきていた。私は勝手に「カズコ」と呼んでいた。本名は知らない。カズコは余所の島で学校へ通っていたことがあるらしく少し英語を話すことが出来た。

カズコは特に美人というわけではなかったが気立てのいい娘だった。もともと我々から見れば現地人は皆同じような顔にしか見えなかったが……ずんぐりとした体型で足も太く唇が分厚くて、ちょうどゴーギャンが描くタヒチの女に似ていた。

あまりにも酷い光景や悲惨な状況を目にする度に私はカズコの下へ通った。

カズコの膝を枕にしてゴロリと寝転がるのが好きだった。カズコの膝はツルツルとして気持ち良かった。

カズコの優しい笑みや楽しげな話し声がなかったら私も、あの軍医や他の二等兵のように狂気の縁に追い込まれていたかも知れない。

まるで時が止まったかのような南の島の外では、着々と戦況が悪化していた。物資の配給は内容も回数も目に見えて減り、久しく吉報を聞かなかった。そしてたまに入ってくる悪報もまた、我々に伝わる頃にはすでに一週間も二週間も前の話であった。

兵の中にはもう戦争は終わっているんじゃないか、自分達がこの島にいることを皆忘れてしまっているのではないかとパニックに陥るものも少なくはなかった。

兵隊も現地人も疲弊していた。

そんな中ただ一人、軍医だけが精力的に研究を続けていた。

そして昭和二〇年、八月二五日、我々は十日遅れで玉音放送を聴いた。悲しむべきなのか喜ぶべきなのか皆判断がつかずただ呆然と、今まで自分達を形づくってきた価値観が崩れ落ちていく音を皆聞いている。

自分達がやってきたことは何だったのか。自分達が行なってきたことは正義だったのか悪だったのか。自分達はこれから何を信じて生きていけばいいのか。

戦争が終わった後の生き方など習ってはこなかった。ましてや敗戦国になった後の生き方など誰も、誰も教えてはくれなかった。

一体何のための戦争だったんだ。一体誰のための戦争だったんだ。現地人の女を犯し家や田畑に火をつけ幼い兄弟同士に殺し合いをさせた。あれは今となっては何のためだったんだ。お国のためという大義名分を失ってしまった今、犬畜生にも劣る行為として我々は罰せられるのではないか……。

それぞれ明朝まで待機しているようにと告げられ、その場は解散した。兵隊達の多くは解散と告げられてもその場に佇み、物思いに耽っていた。

私は軍医にこれからどうするのか尋ねたが彼は何も語らなかった。仕方なく私は自分の宿舎へ戻り、ベッドに横になると緊張の糸が切れたように深い眠りへと入っていった。

そして翌朝、目が覚めて表へ出た私の目の前には地獄絵図が広がっていた。

数々の人体実験や虐殺行為が明るみに出ぬよう、兵隊達は証人を皆殺しにすべく片っ端から原住民を殺していた。

驚き呆れながらも私は真っ先に研究所へ走った。細菌兵器の開発など内容はとても褒められたものではないにせよ、中には貴重なデータも多数残っていた。

そして研究室の扉を開けた瞬間、私は凍りついた。

「昨日、菌の配合を変えてみたんだ。すごいだろう。一晩でこんなになるとは」

軍医は満足げにガラスの向こうを見つめながら呟いた。

そのガラスの向こう側にいたのは……。

「カズコッ」

私は目を剥いてガラスに顔をくっつけんばかりに近づいた。

顔と言わず身体と言わず水泡に覆われ、潰れた水泡からは濁った膿が流れ出ていた。水泡は眉や頭の地肌にも広がっているらしく髪の毛が半分くらい抜けてしまっている。

そうしてガラスに手をついた。その爪の中にも水泡は出来ていて潰れた膿で爪の色がドス黒く変色していた。

[illegible]

私はカズコが入っている保菌室の重たい扉を開けた。

初めて軍医の顔に恐怖の色が浮かんた。

軍医は扉をバンバンと叩いた。そうして私がイスを起こして腰掛けると今度はガラスの方へ回ってバンバンと拳で叩いた。

数時間後、軍医もぐったりとして動かなくなった。

私は立ち上がり保菌室の空気を外へ流した。

60

私は研究室にある菌のストックをも外へ向ってばら撒いてやった。
我々こそが死ぬべきだったのだ。

無色であるはずの菌が風に乗って兵隊達の下へ流されてゆくのが
目に見えるようだった。

水泡まみれになって、のた打ち回って苦しむ彼らの姿も……。

「結局、生きて日本へ帰ることが出来た兵隊は数えるほどしかないな
かった」

老人は静かな、それでいて良く通る声でそう言った。

「あなたも、その、一人」

風がハタハタとビニールシートをはためかせた。ローソクの灯りが
小刻みに揺れる。

「私は島に残りました」

老人が上目遣いに四人の顔を見渡した、ような気がした。

「島に残って、研究を続けたんですよ」

四人の間に無言ではあったがどよめきが起こった。

「研究って、その」

「そう、細菌兵器」

皆が不安げに顔を引き攣らせる中、痩せぎすな女が突然甲高い声
で笑った。

「かつこうたつてダメよ、オジイちゃん。その状況で島に何て残っ
てたら、あなただつて菌に感染……」

老人は顔を上げた。

そして、その顔には……水泡が……。

「ま、さか、その瓶の中味」

若い教師が言いかけたその時、風が強く吹いた。

ローソクの炎が消えた。

暗闇に包まれた。

……。

誰かが手探りでローソクに火を点けた。

「あっ」

老人の姿はそこにはなかった。

そして……小瓶の蓋は開いていた。

数日後、あるニュースが日本中を駆け巡った。

○月○日、フィリピンの○○島で邦人男女四人の遺体が発見されました。遺体はモデルの香崎スミカさん（二七）、会社員の幾島圭介さん（三九）、中学校教員の巽大介さん（二八）、主婦の西川俊美さん（五五）の四人です。

四人は○日、天候不良のためやむなく島へ滞在していましたが、朝になつても四人が姿を現せないのを不審に思ったホテルの従業員が警察へ通報。搜索の結果。日午後、四人が旧日本軍細菌研究所跡で亡くなっているのが発見されました。

建物はすっかり廃墟と化し鬱蒼と草木で覆われており、一体四人が何の目的でここへ集まつたのかは不明です。

尚、四人の遺体は原因不明の水泡に覆われており、現地警察は研究所内に残っていた何らかの薬品が作用したものと見て捜査を進めています。

○○島は第二次大戦中日本の占領下にあり、1940年に細菌研究所が建設。当時○○軍医の指揮の下、細菌兵器の開発が進められていました。開発にあたって原住民を生体実験に使うなど、満州の731部隊と並んで非人道的な実験が行なわれたことでも知られて

おり……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5959d/>

ストーリーテリング

2010年10月8日13時35分発行